

大阪へのスポーツ移入とその発展について（第2報）

—戦前の高等女学校に焦点を当て—

田 中 讓*・北 田 和 美**
新 野 守***・大 松 敬 子****

On the introduction of sports to Osaka and subsequent development (Part 2)

-With a focus on pre-war girl's high school-

TANAKA Yuzuru*

KITADA Kazumi**

SHINNO Mamoru***

OMATSU Keiko****

Abstract

This study found that Osaka has contributed greatly to the development of sports in Japan, but these contributions have not been understood sufficiently.

This fact is also true for women's sports are well. During the Meiji period (1868-1912), women had less opportunities to enjoy sports, but starting in the Taisho period (1912-1926), women were also able to enjoy many more varieties of sports. This was especially true for the students attending girl's high schools.

This study introduces these activities and intend to illustrate how they contributed to social setting of Osaka and the development of women's sports in Japan.

Keywords : Japanese prewar girl's high school, national convention, Taisho Era

キーワード : 高等女学校, 全国大会, 大正時代

平成27年1月7日 原稿受理

*大阪産業大学 人間環境学部スポーツ健康学科教授

**大阪女子短期大学 人間健康科学科教授

***大阪産業大学 非常勤講師

****大阪府立山田高等学校 保健体育科教諭

1. わが国女性のスポーツの黎明

わが国で女性の競技会が多く出現し、また国際的な競技会に参加するようになった頃を「女性スポーツの黎明期」とすれば、それは大正末期から昭和初期（1925～40年）ということができる。

女性の国際競技会への初参加は、1923（大12）年の第6回極東選手権大会におけるオープン種目（テニス、バレーボール、水泳）である¹⁾。正式種目への初参加は、大阪毎日新聞所属の人見絹枝が出場した1926（大15）年の第2回イェーテボリ大会である。人見は走り幅跳で5m50の世界記録、立ち幅跳びで2m47を跳び優勝した。さらに、円盤投では32m62で2位、100ヤード走は12秒0で3位、60mで5位、250メートル走で6位に入り、個人得点15点を挙げ国際女子スポーツ連盟の名誉賞を授与された。彼女は1928（昭3）年のアムステルダムオリンピック大会にも出場し、800mで日本女性初の銀メダルを獲得した²⁾。

国内では、人見に続く国際的な選手を育てようという意図から、大阪で1924（大13）年第1回日本女子オリンピック大会が、健母会・中央運動社主催で開催された。競技内容は陸上競技、野球、庭球（硬式・軟式）、バレーボール、バスケットボール、水泳であった³⁾。その後、明治神宮体育大会や府下連合競技会などの競技会が開かれるようになり、1923（大12）年には50回程度だった女性国内競技会は、7年後には250回を上回るまでに急増している⁴⁾。

このような競技会で活躍し、その発展に貢献したのは、高等女学校の学生であった。高等女学校は、「良妻賢母思想を普及するため」に作られた女子教育機関であった⁵⁾。良妻賢母思想は、明治初期における賢母論から始まり、日清戦争後の女子教育論の隆盛の中で、国家公認の女子教育理念としての地位を確立した女性観であった。その重要な柱の一つに、体力・気力を充実させるための体育教育の振興があった。それは立派な母となり、立派な子を産み育てる母性の健康・体力づくりが必要であった所以である。その結果、高等女学校では、当初から、女子を育てるために適した体育はいかにあるべきかが議論されていた。

1905（明37）年の日露戦争後から大阪でも中等教育の充実が図られ、1900年代には大阪市立高等女学校（現、大手前高校）が、堺高立女（現、泉陽高校）が設立された。そして、清水谷高女（現、清水谷高校）、泉南高女（現、和泉高校）、島之内高女（現、夕陽丘高校）の創立が続いた⁶⁾。1916（大5）年には高等女学校は、府立6校、郡立3校、私立5校（相愛・金蘭会・信愛・梅花・浪速）の合計14校になり、生徒数は4,353人に達した⁷⁾。そして、1910年代には旧制高等女学校の9割が創設され、多様なスポーツが取り組まれるように

大阪へのスポーツ移入とその発展について（第2報）一戦前の高等女学校に焦点を当て―（田中・北田・新野・大松）

なった。そこで、高等女学校の活躍に焦点を当て、大阪の女性スポーツ発展の黎明期を紹介したい。

2. 高等女学生の頑張り

（1）バスケットボールを最初に行った女学校

梅花女学校は、1878（明11）年1月に浪花公会（現、浪花教会）の牧師であった澤山保羅が中心となって設立された大阪における最初の女学校である。梅花の校名は、「梅本町公会」と「浪花公会」の名から命名された⁸⁾。

日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵は、アメリカ留学から帰国後の1894～95（明27～29）年に梅花の校長を務め、この間にバスケットボールを指導した。この様子は、『60年史』⁹⁾の次の記事から伺える。「成瀬校長が米国より覚えて御帰朝になり、土佐堀の狭校庭で盛に行つたる対抗競技ありたり、之所謂現今のバスケットボールなり。（中略）球を中央に投げらるるや否や我勝ちに奪い取り自分の持ち場に投ぐ之を相手方が奪い、入れさじと互いに球を奪い合つては逃げ、追つては取り、相争い、球を早く籠に入れし方、勝ちとなるなり。而して昼食前20分間毎日の如く此競技をなしたる故に有名になり、大阪は勿論神戸・京都より参観人もありたりと云ふ。之所謂日本最古のバスケットボールにして、日本に於けるバスケットは梅花女学校が開祖なりと云うべし。」

1908（明43）年に梅花女学校は北野校舎に移り、ウイルミナ女学校、神戸女学院、同志社女学校などキリスト教系列の学校同士の間で盛んに対抗試合が行われるようになった¹¹⁾。

しかし、大阪の女学校でバスケットボールが本格的に取り組まれるようになったのは第1回女子オリンピック大会（1924年）からである。



羽織袴でバスケットボールを楽しむ女学生
（『梅花女学校80年誌』より）



胸にBのマークが入った袴姿の女学生
（『梅花学園90年小史』より）

市岡高女（現、港高校）は、バスケットボールにも力を入れ、第1回日本女子オリンピック大会に、陸上・水泳・野球・軟庭・硬庭・バレーボールとともにバスケットボールにも出場している。この時来阪した東京竹早高女チームの宿舎に市岡高女の作法室が提供されたことから刺激を受け、バレーボール部、バスケットボール部は練習を重ね、成果を上げるようになった。市岡高女のバスケットボール部は、1924（大13）年の陸軍戸山学校の大会では決勝まで進み、1925（大14）年の第2回明治神宮競技大会では、東京の竹早高女と雨中の決戦を演じ5対3で惜しくも敗れている¹²⁾。

他にも八尾高女（現、山本高校）、夕陽丘高女（現、夕陽丘高校）が活躍する¹³⁾が、中でも清水谷高女（現、清水谷高校）は、1926（大15）年の日本女子オリンピック大会で準優勝している。さらに、1928（昭3）年第1回全国中等学校籠球選手権大会で優勝し、1930（昭5）年の府連合運動会でも優勝している¹⁴⁾。

こうして高等女学校を中心に普及した女子バスケットボールは、1931（昭6）年には木下東作を会長とする関西女子バスケットボール連盟を立ち上げるまでになった¹⁵⁾。

（2）高女の華、庭球

堂島高女（現、大手前高校）の庭球は、1901（明34）年に校地が中之島から北野中学が移転した跡地の堂島に移り、コートが6面あったことから盛んに取り組まれるようになった。当時の校務会議録に、「教員自ら生徒の運動を奨励すること」とあり、まず職員から熱心に始められた。同年の校友会会計報告では、支出総額121円余に比し、テニス費は29円余とかなりの額がラケット、ボール、ネットの購入費として計上されている。

早稲田大学のテニスチームが関西へ武者修行に来た1906（明38）年、大阪では大毎の後援でオールドボーイズがこの歓迎マッチをすることになり、そのエキジビションとして、中之島高女対女子師範の対抗試合が行われることになった。これは日本で初めての女子の



中之島公園での羽織・袴姿の生徒のテニス
（『大手前百年史』より）



大阪府下高等女学校連合テニス会優勝記念
（『和泉高校百年誌』より）

大阪へのスポーツ移入とその発展について（第2報）一戦前の高等女学校に焦点を当てー（田中・北田・新野・大松）

試合で、世間の人気を呼んだが、女子師範が棄権したため、中之島高女のみで試合を行った¹⁶⁾。

1908（明41）年、浜寺公園において関西学生諸学校聯合庭球大会が始まるころには、各女学校においても盛んに取り組まれるようになったが、女性の全国的な大会はまだ開かれていなかった。

1913（大2）年に大阪毎日新聞主催の「第1回日本オリンピック大会」が豊中運動場において開催され、第3回大会から庭球、バスケットボールの女子参加が認められている。

泉南高女（現、和泉高校）から、金納すま・赤阪静、向山慶・岸上サワの2組が出場し、梅田高女（現、大手前高校）・女子師範・夕陽丘高女を次々と破り、金納・赤阪組が決勝戦で3-0と梅田高女を退け一等となっている。同年の中之島秋季庭球大会には、金納すま・赤阪静、向山慶・岸上サワ、城萬壽子・三宅きぬの3組が出場し、金納・赤阪組と、城・三宅組は4回戦を勝ち抜き、決勝で対戦し、3対2で金納・赤阪組が勝利している。

泉南高女では、熱心な取り組みが行われていた。それは、「何れの学校においても庭球を運動の良き方法として奨励しているが、わが校のごとく全校生徒が挙ってやっているとところは先ず他所にはないと言ってよい。わが校は1週1度必ず放課後運動をなさしむるが其の運動は何をなすかと言えば必ず庭球をやる。全校13学級の生徒が互いに試合をやり優劣を競争する。また、生徒対先生という試合もある。（後略）」と校友会誌の『岸乃姫松』にある記述からもわかる。その成果が、大正期の1918年から1921年に行われた、中之島庭球会、関西女学校庭球大会、体育奨励会庭球大会、体育実行会庭球大会などでいかに発揮され、一等賞を獲得している¹⁷⁾。

また、清水谷高女は、1925（大15）年の第8回日本オリンピック大会で浜中・田中ペアが優勝している。そして、1927（昭2）年の全国女子中等学校庭球選手権のシングルスで玉腰恒子が、1928（昭3）年の第5回の大会では、岩田・福井ペアと岩田がダブルスとシングルスで優勝している。さらに、1930（昭5）年にもシングルスで土永、ダブルスで土永・松浪が優勝し、その後も1931（昭6）年から3年連続で優勝するなど華々しい活躍を見せた¹⁸⁾。

市岡高女では、第1回日本女子オリンピック大会開催が決定した時点で硬式に転じている。大会には、中国、フィリピンから女子選手も出場したが、戸田定代、金田咲子が優勝している¹⁹⁾。ちなみに、彼女らが着用した服装は、「田村服」と呼ばれたテニス専用のものであった。



1925 (大14) 年 第8回日本オリンピック大会で優勝した
田中・浜中ペア
(['清水谷百年史』より)



1924 (大13) 年 第6回極東選手権
大会で優勝した戸田・金田ペア
(['第6回極東選手権大会記念
写真帖』より)

(3) 目覚ましい「水泳授業」

大正の初め、大阪府知事大久保利武から「大阪府立中学の生徒には下記水泳の訓練を必修の課目として実施すべし」という訓令²⁰⁾があり、高等女学校においても水泳が取り込まれるようになった。

泉南高女(現、和泉高校)の水泳練習は、他の女子校に先駆けて1917(大6)年から始められていた。水泳日誌には「男子中学校においては盛んであるが、女子の水泳は従来の習慣にとらわれ各学校が大抵躊躇しているが、先鞭をつけ実施する。夏季休暇を利用して開始すること。全校生徒から有志を募り51名を得る。毎日午前9時より11時まで練習、泉州織物工場裏手を水泳場に定め、脱衣所、休憩場、湯呑場の設備を整え、浜寺海水浴婦人部水泳教師井上サダコを聘し、本校職員は監督の任にあたり、諏訪校医毎日臨場し、水泳に関する講演を為したる。」とある。

このように、水泳練習が十分な備えのもとに実施され、泳いだ距離によって成績を定め、5町(5人)、2町(1人)、1町(6人)、半町(6人)、十間(7人)、5間以下(30人)という成果を挙げている²¹⁾。

臨海訓練は他校でも始まり、1922(大11)年に大手前高女が宮津(京都府)²²⁾、堺高女は大浜²³⁾で、1926(大15)年には清水谷高女が諏訪ノ森²⁴⁾で実施している。

女子の水泳で特筆すべきは、市岡高女が日本で最初に女学校でプールを建設したことで、茨木中学に遅れることわずか約10年のことであった。市岡高女(現、港高校)は、1911(明44)年、江戸堀高等女学校としてスタートし、1914(大3)年、市岡の新校舎に移転し市岡高等女学校になる。プールは、1924(大13)年に建設を申請し、1926(大15)年に竣工



泉南高女の水泳訓練
（『和泉高校百年誌』より）



鎌倉選手の華麗なフォーム
（出所『おおさか百年』
サンケイ新聞社より）



ロサンゼルス五輪
の松沢初穂
（『港高校創立
70年誌』より）

された。

水泳部はこのプールのお陰で活躍し、1929（昭4）年「健母会」主催の大阪女子校の大会で、松沢初穂が自由形50mで35秒の日本記録を作っている。また、1930（昭5）年5月の第9回極東オリンピック大会（東京）に、松沢、浜崎（創立70年記念誌の写真から、自由形と推測できる）が出演している。同年9月には健母会の大会で、松沢が50m自由形に35秒（日本公認記録）、100m自由形に1分15秒9の記録で優勝している。

松沢はその後日本女子体育専門学校（現、日本女子体育大学）に進み、ロサンゼルスオリンピック（1932年）自由形に主将として出場している。続くベルリン大会では、トレーナー兼コーチとして日本選手団を支えた。後に母校に体育科教員として奉職する²⁵⁾。

大阪の高等女学校卒業でオリンピックに出場した選手に、ほかに清水谷高女の鎌倉悦子がいる。鎌倉は、1931（昭6）年、第6回明治神宮日本選手権大会において、飛板56.28、高飛び込み20.90点とともに1位を獲得し、オリンピックの候補選手になった。

卒業後、1932（昭7）年のロスアンゼルスオリンピックに飛び込み選手で出場し、飛板60.78点で7位、高飛び込み31.36点で6位に入賞している。

本人は、「出場が決まったときは、自分ではたいしたことと思わなかったが、周囲の人たちが大騒ぎをするので、これは大変なことになったと思った。」と語り、さらに、練習の大変さを以下のように回想している。「学校にはプールがなく、また、10m飛び込みのプールを持っていたのは、近くでは茨木中学だけでした。しかたなく茨木中へ練習に通うことになりましたが、今と違って男女の交際がやかましいときです。しかし、オリンピック候補選手だというので親と一緒になら、という条件つきでやっと学校から許可がおり、毎日、母と大阪駅で待ち合わせ、親子で練習にかよったものです。」²⁶⁾

(4) 女子校の運動会

大手前高女の中の島時代（1886～1902年）は、中庭程度の運動場しかなかったが、生徒はテニス、ピンポン、遊戯などを楽しんでいた。1902年（明35）年に堂島に移って校地が拡充されると、スポーツを楽しむ女学生が増え、運動会の前身である遊戯会が校友会（現、自治会）主催で春、秋の2回開催されるようになった。1903（明36）年の教務日誌には、「遊戯会午前9時ヨリ午後4時 来観者知事以下数千人」と記されるほどに大きな催しで、体操・競争・ダンスなどが繰り上げられた²⁷⁾。

一方、清水谷高等女学校は、1901（明34）年大阪府第一高等女学校として創立され、明治期に創設された学校で唯一移転をしていない。

初代校長大村忠二郎と日本女子大学創設者で梅花女学校でバスケットボールを教えた成瀬仁蔵は、公私両面で交流があり、成瀬の教育的理念の影響も受けたと考えられる。清水谷高等女学校の敷地は、日本女子大学校を大阪に創設する予定地であった。

清水谷高女の1902（明35）年の3回目の運動会のプログラムが、『校友会記録』に記載されている。24種目のプログラムが用意され、生徒だけでなく教員も戴囊競走（男性教員）や豆囊競走（女性教員）を行っている。この運動会には観客数百人、翌年には外国人の来賓もあったという。当時としては非常に多彩なプログラムであった。この背景には、東京女子体操学校1期生の小野（旧姓 小林）ゑつの存在があった。「日本で最初の女子体操学校第一回出身」の小林は、体操・遊戯・ダンスなど多くの種類のプログラムを採用し、女子体操学校で学んだ成果を教育現場に反映させた²⁸⁾。

清水谷の運動会は、校舎改修のため1923、24年と2年間中断された。2年ぶりに再開した大会では、従来の遊戯式の競技を全部やめ、オリンピックの種目と公認規則の下に陸上競技が行われ、その間に体操とダンスが入ったものに変化した。これは、第6回極東選手権大会の影響を受けたためと考えられる。1925（大14）年の記録によれば、50m走、100



梅田高女時代の運動会でのメイポールダンス
（『大手前百年史』より）



清水谷高女の昭和初期のトラックがはっきりと見える運動会の一コマ
（『清水谷の70年』より）

大阪へのスポーツ移入とその発展について（第2報）一戦前の高等女学校に焦点を当てー（田中・北田・新野・大松）

m走、200m走、400mリレー、800mリレー、走幅跳び、走高跳び、ホップ・ステップ・ジャンプ（三段跳び）、ボール投げ、綱引きが種目となっている。

近代オリンピック大会に陸上競技の女性種目が加わったのが1928（昭3）年で、清水谷高女の運動会は、それに先立ち「オリンピックゲーム」と同じ種目・規則で行われていた。上記の種目を「日本女子オリンピック大会」と比較すると、綱引き以外は同じである²⁹⁾。

なお、1903（明36）年天王寺公園で開催された第5回国勧業博覧会において、皇族の前でテニスやピンポン等の模範演技を行うほどに清水谷のスポーツ活動は盛んであった。

（5）陸上競技

高等女生らの陸上競技は、1922（大11）年4月30日に東京女子高等師範学校校庭で女子連合協議会が開催したものが最初である³⁰⁾。

その年の11月12日には、大阪府女学校連合運動会が、健母会主催、大阪時事新報後援で鳴尾運動場で開催された。種目は100m、200m、1/2マイルリレー、走高跳、バスケットボール投げと少なかったが、女子スポーツの普及という観点では大きく貢献した³¹⁾。

2年後の1924（大13）年に始まった健母会と中央運動主催、大阪毎日新聞後援の日本女子オリンピック大会は、本格的な女子の大会の嚆矢となった。

第1回は、東京、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、滋賀、愛知、三重、岡山、徳島、愛媛、香川、福井、広島、山口の16府県から参加選手1,800名あまりを集めた。この他、合同運動に参加する大阪市内の小学生1,500名、ならびにダンスを演技する明浄高女の生徒300名が参加した。

100mでは市岡高女の前田すま子が2位、200mでは信愛高女の山下花子が1位、夕陽丘高女の赤羽てい子が2位、樟蔭高女の吉原美喜子が3位、100mロー・ハードルでは樟蔭高女の竹原鶴子が1位、泉南高女のト半英子が2位と活躍した。

フィールド種目では、現在の中学女子に用いられる重さ6ポンド（2.7kg）の砲丸投げでは大阪女子師範の吉武富子が1位、樟蔭高女の中井まさ子が2位、野球用ボール投げでは、樟蔭高女の中井まささんと飯田純子が2、3位を占めている。さらに、バスケットボール投げでは大阪女子師範の宇山つね、中らくが1、2位を占め、西華高女（現、大阪市立大学家政学部）の奥村清子が3位となった³²⁾。

1924（大13）年には、大阪府主催による大阪府下高等女学校陸上運動大会が始まった。実施種目は100m、200m、800mリレー、走り幅跳び、走り高跳びであった。学年毎に3から5のグループに分け実施されたところに特徴があった。三島高女（現、春日丘高校）、夕陽丘の公立校だけでなく相愛、樟蔭、信愛の私立校の頑張りが目立った³³⁾。

(6) バレーボール

大阪のバレーボールは、1923(大12)年の5月に行われた第6回極東選手権大会において、中華女子チームを破ったことが契機となり急速に発展していった。同年6月には、大阪毎日新聞と健母会は、神戸高商の多田徳雄を大阪府下の女学校にコーチとして派遣している。さらに、12月には、大阪体育協会主催極東大会出場女子バレーボール関西選手権大会と、大阪毎日主催第一回女学校バレーボール大会(於、大手前高女)が開催されており、大阪の女子バレーボールの盛況がしのばれる³⁴⁾。

前述したように、市岡高女は、第1回日本女子オリンピック大会(1924年)のために来阪した東京竹早高女チームから刺激を受け、バレーボールにも盛んに取り組むようになった。同年に東京の陸軍戸山学校で開催された第1回全日本バレーボール選手権大会では竹早チームを破って優勝し、さらに、明治神宮第1回競技会(1924年)にも優勝し黄金時代を築いている³⁵⁾。

(7) ウォーキングレース(強歩競争)・登山・スキー

文部省は、1924(大13)年11月3日を「全国体育デー」とし、各学校で体育に関する行事を行わせた。同時に内務省は、第1回明治神宮体育大会を開催するなど、体育スポーツ政策への取り組みは挙国体制で行われるようになった³⁶⁾。

校舎改築中であった清水谷高女では、11月6日にウォーキングレースを行っている。十三橋北詰から中山寺門前までの約五里半(22km)を6区にわけ4時間半で各地の終点に関所を設け、通過するごとに1点を与え遅刻者は1点を減じた。得点数を在籍人数で割るとクラスの得点率が得られ、このときは学年として1年生が優勝し、個人では3年の和気薫子が3時間13分16秒で1位になっている。716名の参加者中、時間内に歩けた者は555名であった。

この行事は、2回目からは岡町原田神社より宝塚相の松原の間、4里(16km)を予定時間3時間として競うことになり、1942(昭17)年まで続けられた。また、1928(昭3)年には、ウォーキングレースソングも作られている。

しかし、戦時色が強くなるにつれ名称と内容が変わる。1941(昭16)年には団体徒歩訓練となり、1943(昭18)年には四条畷神社への鍛錬行軍となり、11月6日檀原神宮参拜行軍、25日には体力章検定強歩行軍が加わり、団体的訓練に変身していった³⁷⁾。

一方、大正になると登山に取り組む学校が出始めた。市岡高女は、1913(大2)年2月11日に初めて耐寒雪中登山を六甲山で行い話題になった。この行事は、毎年恒例になり、生駒、鞍馬、比叡山と実施場所を変えながら重ねられていく³⁸⁾。



昭和初期の富士山頂下での写真
（『大手前百年史』より）



高女の野球試合（『港高校80年誌』より）

さらに、1925（大14）年には大手前高女³⁹⁾が、翌年には堺高女が富士登山を行っている⁴⁰⁾。また、清水谷高女でも現在のハイキングに当たる遠足部が誕生し、大阪近郊の山々に登っている。樟蔭高女も体育教師の朝輝記太留の指導で1927（昭2）年に中央アルプス槍ヶ岳、1937（昭12）年には富士登山を行っている⁴¹⁾。

また、大手前高女ではスキー部が1928（昭3）年に創設されている。同スキー部は1934（昭9）年滋賀県饗庭野スキー場で開催された第1回関西女子スキー大会（朝日新聞主催）に参加し、第3回大会、第13回大会では大手前高女が1位の成績をおさめている⁴²⁾。

（8）その他のスポーツ

女子の野球は、軟式野球の誕生に伴い急速に取り組まれるようになり、1919（大4）年名古屋新聞主催で高等女学校野球大会が、開催されるまでになった。近畿では、1922（大11）年に和歌山県の粉河高女（現、粉河高校）、和歌山高女（現、桐蔭高校）、橋本高女（現、橋本高校）に野球部が誕生した。大阪では、市岡高女、堺高女、泉南高女がそれに続いた。しかし、1925（大14）年、文部省主催の全国高等女学校校長会議「體育ニ関スル件」で女子に過激であるとの判断が下された。女子が足を開いてバットを振るなど女子からぬ行為として1926（大15）年発布の『改正学校体育教授要目』から削除されるに至り、次第に廃れていく⁴³⁾。

大阪で女子最初のハンドボールの試合は、1938（昭13）年11月に甲子園南運動場で行われた倉敷高女（現、倉敷青陵高校）対生野高女（現、勝山高校）の模範試合（8対4で倉敷高女が勝つ）である⁴⁴⁾。梅花高女は、1941（昭16）年の明治神宮国民体育大会では準優勝し、その後も2年連続して関西送球選手権大会で優勝するほどの強豪校であった。この背景には、梅花が関西で初めてハンドボールを体育の課目に採用したことがある⁴⁵⁾。

引用・参考文献

- 1) 佐藤信一『大阪スポーツ史』大阪市体育厚生会 1954年 pp.7-12.
- 2) 白銀茂夫『なにわのミニスポーツ史』丸善(株)大阪出版サービスセンター 2003年 pp.143-147.
- 3) 前掲 2) pp.125-128.
- 4) 來田享子「日本女子スポーツ連盟による女性スポーツ促進運動に関する研究」全国の女子生徒数と女性競技会の開催数 p.185
- 5) 文部省『学制百年史』帝国地方行政学会 1972年 pp.348-349.
- 6) 大阪府『大阪百年史』トッパンセールズ 1968年 pp.1070-1073.
- 7) 大阪府『大阪統計書大正5年』1916年 pp.478-479.
- 8) 梅花学園『梅花学園百十年史』1988年 pp.3-11.
- 9) 前掲 8) pp.98-111.
- 10) 梅花学園『梅花学園90年小史』1968年
- 11) 前掲 8) pp.98-111.
- 12) 大阪府立港高校創立90周年記念事業実行委員会『創立90周年記念誌』2001年 pp.55-56.
- 13) 松本久男『大阪バスケットボール協会のあゆみ・70年の軌跡』大阪バスケットボール協会70周年記念委員 2001年 pp.14-15.
- 14) 大阪府立清水谷高等学校100周年記念事業実行委員会『清水谷百年史』 2001年pp.166-172.
- 15) 前掲 2) p.134
- 16) 大阪府立大手前高等学校百年史編集委員会『大手前百年史』1987年 pp.692-696.
- 17) 大阪府立和泉高等学校校史編纂委員会『和泉高校百年史』2001年 pp.72-75.
- 18) 大阪府立清水谷高等学校校史資料収集整理委員会『しみづだに 1900～1990年』1991年 p.43
- 19) 前掲 12) p.55
- 20) 大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会『茨木高校百年史』1995年 p.336
- 21) 前掲 17) pp.64-65.
- 22) 前掲 16) pp.680-687.
- 23) 大阪府立泉陽高等学校記念誌編集委員会『泉陽高校百年』2001年 p.142
- 24) 前掲 18) pp.145-152.
- 25) 大阪府立港高等学校創立70周年記念誌編集委員会『創立70周年記念誌』1981年 p.19
- 26) 前掲 14) pp.166-167.
- 27) 前掲 16) pp.630-636.
- 28) 前掲 14) pp.44-50.

大阪へのスポーツ移入とその発展について（第2報）一戦前の高等女学校に焦点を当て―（田中・北田・新野・大松）

- 29) 前掲 14) pp.152-159.
- 30) 山本邦夫『近代陸上競技史 中巻』道と書院 1974年 pp.1440-1449.
- 31) 前掲 30) pp.1586-1597.
- 32) 山本邦夫『近代陸上競技史 下巻』道と書院 1974年 pp.2127-2145.
- 33) 前掲 32) pp.2372-2374.
- 34) 多田徳雄『排球競技法』平凡社 1931年 pp.61-62.
- 35) 大阪府立港高等学校創立90周年記念誌編集委員会『創立90周年記念誌』2001年 p.56
- 36) 今村嘉雄『日本体育史』不味堂書店 1970年 p.509
- 37) 前掲 14) pp.138-145.
- 38) 前掲 25) p.17
- 39) 前掲 16) pp.701-702.
- 40) 前掲 23) p.156
- 41) 学校法人樟蔭学園『樟蔭学園80周年記念誌』1997年 p.21
- 42) 前掲 16) pp.703-704.
- 43) 田中亮太郎「女子野球について」大阪芸術大学紀要『藝術18』1922年 pp.119-128.
- 44) 大阪高体連50周年記念事業企画運営委員会『大阪高等学校体育連盟50周年記念誌』1998年 pp.81-83.
- 45) 前掲 8) p.158